

# イギリス経済学の方法論成立期における演繹的方法の意味

## —ウェイトリの経済学方法論—

只腰 親和(横浜市立大学)

### I 立論の前提と本報告の課題

イギリスにおいて経済学に関する方法論的議論が本格的に始まったのは、1830年頃だとされている。(Blaug,56) また19世紀の多くの期間、演繹的方法が指導的地位をしめたとも言われている。(Hutchison,258) すなわち19世紀イギリスにおいては、自覚的に方法論が語られるようになってからおよそ半世紀の間は経済学において演繹的方法が主流的立場にあった、というのが広く認められた見解である。

しかし他方、従来の研究史において経済学の方法としての演繹的方法それ自身は、その依拠する経済学上の基本原理の経験性への疑義、*ceteris paribus* 条項により命題の経験的検証が不可能なこと等の理由で、消極的に扱われてきた。その結果、研究史上で演繹的方法を擁護した経済学者(例えばリカード、シーニア)が分析対象にされる場合には、それらの経済学者の演繹的方法に関する積極的主張に注目するよりも、彼らの経験的、非演繹的側面に光を当ててきた。彼らの立場を評価することになりがちであった。(Hollander, O'Brien)

つまり一方で19世紀の多くの期間イギリス経済学において演繹的方法が支配的であったという事実は認められながら、他方で演繹的方法が支配的地位を占めた積極的な根拠についてはじゅうぶん検討されていないのが研究史のおおかたの現実である。こうした現状に鑑み、本報告では経済学における演繹法の積極的意義について検討することにした。

### II 分析の対象と方法

上のような問題関心に基づき本報告ではウェイトリを取り上げて彼の経済学方法論を検討する。特にウェイトリを取り上げる理由は、彼がシーニアと並んで、「経済学方法論の古典派的[＝演繹的]立場の形成に貢献した」(Prasch,1106)とされながらも、従来、彼の方法論についてじゅうぶんな検討がなされてこなかったこと、彼はもともと論理学の専門家で経済学の書物を書く以前に論理学の書を著わしていることによる。演繹的方法とは三段論法のことであり、経済学における演繹的方法を課題にする本報告で、演繹的方法＝三段論法について論じた一書を上梓した人物を取り上げることは意味あることだと考える。実際、後述のように彼の論理学と経済学は密接な関係にある。

分析の方法については以下のような立場に立っている。演繹法、およびそれとおおく対置される帰納法はいずれも学問の論理に関するカテゴリーである。したがって演繹法論者と帰納法論者との間で論戦が交わされる時には、基本的に論理のレベルでそれが行われる。しかし私は、演繹法なり帰納法なりのいずれか一方が、抽象的、純論理的に優っていると絶対的に判定することは可能ではなく、方法論を歴史的視点から研究する場合そのような手法は

有効ではないと考える。むしろ、特定の時代や状況の中で特定の方法論が積極的に主張される根拠を解明することが必要でもあり有効でもある。別言すれば本報告においては、ウェイトリの演繹的方法の主張が有効性を持ちえた時代背景について、科学社会学的な視点から一定の前提を置いている。

シュンペーターは1830～40年頃のイギリス経済学について、経済学者たちが経済学の「範囲、方法、論理的基礎」について関心を発展させた「相対的成熟」の時期であったと述べている。(Schumpeter,534) 言い換えればウェイトリの時代は、経済学が一個の discipline として自立しつつあった時期であったとみなしうる。そうした経済学が学として自立しつつあったという状況に適切な方法として、演繹的方法を捉えていくのが本報告の立場である。

### III ウェイトリの経済学方法論

#### 1) ウェイトリについて

Richard Whately 1787-1863

1808 Oriol College 卒

1826 *Elements of Logic* (以下、ELと略記)

1828 *Elements of Rhetoric*

1829-31 Professor of Political Economy at Oxford

1831 *Introductory Lectures on Political Economy*(2<sup>nd</sup> ed.1832) (以下、ILPEと略記)

1831~ Archbishop of Dublin

#### 2) 基本的諸概念の定義

以下、演繹的方法の立場に立つウェイトリの方法論が、上に述べたような経済学に関する時代状況の中でどのような意味をもっていたかを考察する。具体的には、演繹的方法の要諦である、基本的概念の定義および論理的推論のふたつを中心にして、ウェイトリが経済学における演繹的方法に関してどのような見解を抱いていたかを考察する。

##### 2)-a 日常用語と専門用語の区別

演繹法においては基本的概念の厳密な定義が、当該方法の前提にされている。ウェイトリも経済学における基本的諸概念の厳密な定義の必要性を主張しているが、それは次のような理由による。彼によれば経済学の専門用語は、それを学ぶ「学徒にとって耳新しくはなく、耳に馴染んでいる」。しかし通常の会話の用語と共通であるからこそ、「きちんと構成され、確立した専門用語 a well-constructed & established nomenclature」(ILPE,240)が定義されねばならない。ウェイトリはこのように専門用語を定義することが、「学術的な慣行 pedantic practice」(ILPE,242)であることを承知であえて主張している。コーツは学の自立には、「門外漢に理解できない秘教的な用語の開発」が必要だとしているが(Coats,397)、ウェイトリはまさしくそのことをここで高唱していよう。

## 2)-b 定言的命題と仮言的命題

ウェイトリは定言的命題 *categorical proposition*、仮言的命題 *hypothetical proposition* という論理学の伝統的なカテゴリーを経済学に応用して、経済学における基本概念の定義づけについて興味ある論を展開している。それは ILPE のマンデヴィルについて論じた部分であるが、その論旨は次のようなものである。

ウェイトリは、経済学が道徳的観点から不適切な学ではないかという経済学に対する当時の批判への応答の文脈で、マンデヴィルを取り上げている。ウェイトリによれば、マンデヴィルの有名な「私悪は公益」という命題は、定言的と対比される仮言的命題である。すなわち、善悪や富について一般に流通している考えを仮に前提にするならば、富と徳とは両立しないというのが、マンデヴィルの主張になる。この仮言的論法を認める限りマンデヴィルの主張は妥当であると、ウェイトリは考える。しかしウェイトリの真意は、マンデヴィルの主張を肯定することよりもむしろ、一般の人々が無反省に用いている日常用語を所与として議論を進めること(仮言的論法)にたいする疑念にある。ウェイトリは、日常的用法では経済活動に関する用語にどうしてもつきまとう道徳的意味合いを脱色することを主張しているのである。じっさい彼は、経済活動に密接に関連する用語である *avarice* を *desire of wealth* に、*envy* を *emulation* というように、より価値判断から中立な用語への定義のしなおしを主張している。

マンデヴィルのように一般の人々の日常用語を所与として学術用語に用いることも、学の経験性を重んじればありうることであろう。しかし経済学が科学であるためには、道徳的判断の眼で見られがちな人間の行為について、価値判断から自由な定義づけが必要だというのがウェイトリの立場と言えよう。

## 3) 理論と経験の関係—理論負荷性の主張

上のような日常用語と専門用語の区別にせよ、定言的命題と仮言的命題の区別にせよ、ウェイトリの方法論にたいしては、経済学の経験性の立場から異議が呈せられよう。換言すれば、経済学は経験科学である以上、経験的事実をもっと尊重すべきであるという異議である。このようなありうべき批判(あるいは実際にあった批判)にたいして、ウェイトリは経済学における観察事実の問題をけっして等閑にふしていたわけではない。その点に関して彼は、20世紀に科学認識論で主流化する理論負荷性論を先取りする議論を展開している。

ウェイトリによれば、「人間は無意識のうちに理論化する *theorize* ように形作られている。諸事実は、人間の心のなかで、本人がそういう意図をもたなくとも、一定の分類に配列されてしまうのである。」(ILPE,235)「各個人はそれぞれの心の中に、当該主題に関する一定の大前提または原理をもって、感覚にじっさいに現前することの観察が小前提をなし、経験したこととして報告される言明は、実はそれらの前提の結合から導き出された結論なのである。」(ILPE,69) したがって、一般に言われる経験と理論との対比は、「注意深く調べれば…より不完全で粗野な理論と、より注意深く形作られた理論」との対比である。(ILPE,68) 経験的事実

と理論に関してこのような立場に立つウェイトリから見れば、堅固な理論なしにやみくもに事実を収集することは、「近眼の人を丘の頂上に連れて行って彼の視野を拡張しようとする試みに」等しいということになる。(ILPE,236)

要するにウェイトリは、観察事実に対する理論の先行性、観察データの理論負荷性という現代の科学認識論を粗野な形ではあれ主張していたといえる。この主張が本報告との関連でもつ意味は次の点にある。ウェイトリの演繹的方法擁護の主張はけっして認識における経験的契機を無視したのではなく、科学的認識における観察データの性格について、現代にも通ずる視点からの吟味に基づくものであった。その点で彼の方法論的立場は、イギリス伝来の経験論的認識論に関する、一定の認識批判に立脚していたと言えよう。(彼の独自のペーコン観もそのことを立証している。)

#### 4) 論理的推論

上のような認識論的主張は経済学に限定されぬウェイトリの科学認識に関する一般的立場であったが、より特殊に経済学に限定した場合にも、(あるいは限定した場合にこそ)その主張は適合的であった。

##### 4)-a 経済学の方法論的特質

ウェイトリによれば、諸学が科学の名を主張するためには、方法の面で一般に二つの条件を満たす必要がある。①データの正しい確認、②データから結論を導出する過程の正しさがそれである。①が帰納的過程に、②が演繹的過程にそれぞれ相当し、どの学科も①②の両条件を満たす必要はある。だが学科によって①②の重要度には相違がある。例えば純粋数学では②がほとんどすべてであり、地質学では①がひじょうに重きをなす。ここでの主題である経済学について言えば、②の推論過程の正確さが重要な部分を占めるというのが、ウェイトリの見解である。

理由)

- ・ 経済学が基づくべき諸事実は、万人の観察の範囲内にあり、少数で単純である。
- ・ 経済学における、理論的部門と実践的部門を混同すべきではなく、後者においては多くの事実についての知識が必要だが、一般的原理を探求する前者においては、それが基づくべき諸事実は、万人の観察の範囲内にある。
- ・ 経済学は、その対象が万人に身近であるだけに、親近性と正しい知識とが取り違えられている。⇒厳密な用語の定義と、それに基づく正確な推論の必要性
- ・ 経済学はたしかに歴史の新しい学問だが、その新しさの意味は、個々の事実の新しさではなく、周知の諸事実を論理的に配列することの新しさにある。

こうして経済学においては、専門用語の厳密な定義とそれに基づく正確な推論(=演繹法)に裏付けられた理論の重要性が主張されることになる。要するに、「新しい学問的思索の体

系の結果としての新しい諸現象 new phenomena in consequence of a new system of philosophizing」(ILPE,238)の発見の重要性が説かれている。

#### 4)-b 論理的発見と物理的発見の区別

このような論理のすすめ方を理論的に正当化するのが、ウェイトリの論理学のカテゴリーである物理的発見と論理的発見 physical discovery, logical discovery の区別である。彼は EL の中で、学問研究で行われる新しい真理 new truths の発見を上の方のふたつに区分しているのだが、このうち物理的発見は文字通り、これまでだれにとっても未知の事実の発見を意味している。それにたいして論理的発見は、幾何学の定理の証明を教師から教わる生徒の例のように、一つ一つは既知の知識に基づいて推論によってあらたな知識に到達する場合である。

そしてこれら二つの発見の分類のうちで、経済学に関連するのは論理的発見の方である。上に見たように、経済学における新しさとは諸事実の新しさではなく、既知の諸事実を論理的に整序することの新しさであった。すでに周知の事象についての確実な知識から、しかるべき知識を選択しそれらを演繹法によって結合することを通じて経済学の対象世界が構成されることになる。

総括的に要約すれば、日常用語を使用する通念に覆われた世界とは異なった、学的認識の対象としての経済学の対象世界は、通俗的価値判断から自由に定義された専門用語と、それら専門用語のげんみつな論理的連鎖を通じて措定されるということである。

#### 4)-b カタラクティクスの意味

経済学が対象とする日常の経験世界は即時的には、万人にとって馴染み深くはあっても、錯雑したとりとめのない世界である。上に見てきたようなウェイトリの方法論は、そのような対象世界について、日常的現実とは異なる科学的現実を構成することを企図するものとみなしうる。彼のそのような方法論的立場をさらに確認するために、彼のカタラクティクス論を検討しよう。

ウェイトリが経済学の名称として Political-Economy に代えて Catallactics を提唱したことはよく知られている。交換の科学 Science of Exchanges とも言い換えられているカタラクティクスを彼が提唱した理由は次のようなものであった。

ウェイトリは、“人間は動物の中で唯一、交換を行う動物と定義でき、この交換という観点でのみ人間は経済学の考察対象となる”(ILPE,7)という趣旨のことを述べている。すなわちカタラクティクスという呼称の採用は、経済学が人間の諸属性のうち、とくに交換という側面に焦点をあてていることを明示する意図をもつものであった。前世紀(18世紀)の社会科学はスコットランドの道徳哲学に代表されるが、道徳哲学では人間を総体として考察するところにおおきな特徴があった。カタラクティクスを巡ってのウェイトリの上の発言は、前世紀からの学問観の転換を物語っている。つまり、人間や社会を対象とする知的営みがひとつの学 discipline になるためには、特定の観点に立って特定の側面に焦点をあてることが必須であるというのが、カタラクティクスという呼称にこめたウェイトリの意図であった。

そしてこのような学問観は、近代に固有の文化的所産としての近代科学に独自の学問観で

ある。個別科学の使命は、錯雑した対象をまるごと捉えることではなく、特定の観点から特定の分析装置を用いて特定の局面を精密に分析することにあるというのが、近代科学に特有の立場だからである。

#### IV むすび

要するに経済学は、主体については「交換」、客体的には「市場」という明確で限定された観点に立脚しており、その観点から概念構成をおこなうべし、というのがウェイトリの基本的立場になる。経験論の伝統が強固なイギリスで、「経験」よりも、「理論」や「論理」に大きな力点をおく方法論をウェイトリが展開した基盤には、こうした近代科学的な学問観が存していたのである。

II でウェイトリの方法論が時代状況に適合的なものであると述べたが、それは次の理由による。

- ① ウェイトリの時代は、オックスフォード大学を嚆矢としてイギリスに経済学教授ポストが創設されたり、経済学クラブが設立されたりしたイギリスにおける最初の経済学の制度化の時期であった。学問の世界全般について言ってもこの時代は、諸学が近代科学の姿態をまといつつある時代であった。そうした背景の下で、上に述べたような内容のウェイトリの所論は、興隆しつつあった近代科学の思想に適合的なものとして、経済学の学としての自立に寄与するものであった。
- ② 当時は経済学に関与する人々として、実務家 *practical men* の存在を無視しえなかった。ウェイトリが否定的に捉える「経験」や「常識」は、実務家を担い手とするものであった。つまり経験に、理論や厳密な論理を対置するウェイトリの方法論は、素朴な経験や常識を砦にする実務家に対して、明確な科学的な手続きに立脚するアカデミックな専門家を擁護する意図をもつものであって、この点でも彼の議論は経済学の、固有の意味での学としての自立を志向するものであった。

#### 参考文献

Blaug, M. 1980. *The Methodology of Economics*.

Coats, A. 1991. "Economics as a Profession." In A.W. Coats, *The Sociology and Professionalization of Economics*. 1993.

Hollander, S. 1985. *The Economics of John Stuart Mill*. Vol. I Theory and Method

Hutchison, T. 2000. *On the Methodology of Economics and the Formalist Revolution*.

O'Brien, D.P. 2004. *The Classical Economists Revisited*.

Prasch, R. 1996. "The Origins of the A Priori Method in Classical Political Economy: A Reinterpretation." *Journal of Economic Issues* 30(4): 1105-25.

Schumpeter, J. 1954. *History of Economic Analysis*.